

バットクラス

岡本かの子

青空文庫

スワンソン夫人は公園小路パークレーンの自邸で目が覚めた。彼女は社交季節が来ると、ロンドンの邸宅に帰って来る。彼女は昨日までスコットランドの蘇格蘭の領地で狐を狩って居た。その前はフランスのニースのお祭に招かれて行って居た。

室内装飾の弧と線と面の屈折と角の直截と金属性の半螺旋はんらせんとが先刻から運ばれているアイオーブンアイオーブンナーの寝床の朝飯の仕度を守って待ちくたびれている。この邸全体の造りはジョージアン式の古い建築だが、客間と食堂と彼女の居間だけは現代式に改造した。その余の造作を仕直す事は許され無い。保険会社の評価係の技師が、

「これほどの由緒ある建築にあまり手をつける事は賛成出来ない。骨董的こつとうてき価格を減損するといふものだ。自然保険料を値上げしなければならぬ」と彼女の夫に忠告したからである。

この邸には十七万磅ポンドほどの保険がつけてある。

彼女の夫は保守コンサヴァチフ党の上院議員だが政治には全く興味を持た無い。それよりも彼の家門の名望をできるだけ享樂する事に生き甲斐を感じて居る。英国や、歐洲大陸や、アメ利加では、まだスコットランドの領主ランドロードという封建時代の鎧兜よろいかぶとを珍重する。一人

間は仮装会を好むものらしい。といつてスコットランドの領主などという数代の手数のかかった鎧兜を今なお真面目顔で着て居られる人間も滅多に無いので、彼は世界到るところでもてる場所を見付けるのに骨が折れぬ。だが贈られたものには自然返礼が必要となり、各地で接待して呉れた人達を彼は英国で接待し返さなくてはならない。

その上彼は、

「わしの城キャッスルにもぜひ来て見なさい。いろいろ面白い事がありますわい」

などと愛想の好い言葉を容易に振り出すのだ。

「城」という言葉に魅着して本気で訪ねて来る連中がかなりある。だが客は多く亜米利加の家具月賦取附会社の社長の一族や濠洲の女金貸等で、フランスの伯爵夫妻やスペインの侯爵一家などはあまり来ない。

「城」に縁の遠い身分の連中ほど多く訪ねて来たがる。時にはまたとんだいかものが紛れ込む。ポーランドの貴族と自称する片眼鏡の男は城の中の礼拝堂から処女マリア像の眼を盗み取り、その上前スワンソン夫人を誘惑しかけて行ってしまった。処女マリアの彫像の眼は駝鳥だちようの胃の腑はらを剖いて取ったという自然のダイヤがいられた。これをそつと紙で巻き耳の穴に押し込み、正門から素知らぬ顔で堂々とその片眼鏡のにせ貴族は退去した

そうだ。そういう時でも、主人はあく迄英国の由緒ある旧家の主人としての体面上、人前であわてたり激怒の色を見せはしなかつた。

そういう事があつたにしろ頻ひんぱん繁な主人の招待、被招待癖はやまなかつた。彼の生理的運動には是非それも必要なものとなつて仕舞つてゐる。そして彼は客を受けるのに少くとも彼の家の紋章が持つてゐる（歐洲古名家紋章録に載つてゐる）骨董的品位にふさわしい程度には待遇しなければならぬと考へてゐる。競ダーレー馬の馬も持つて居なければならず、領地に狐狩の狐も飼つて置かなければならず、城の台所にスコットランドの小唄を美しい声でうたいながらパンをこねる女もたくさん養成して置かなければならず——大した費用がかかる。

始めはこの古い家柄を衷心から尊敬するスコツチの大蔵大臣の肝煎きそいりで手堅い公債ばかり買入れ、その利息で楽々生活費が支弁出来た。しかし彼の生活がかさむにつれ、段々自分極めて危険率の多い投資に關係し増収を図るようになった。フランス人のブローカーが彼の居間に自由に出入して殖民地の一獲千金の紙上利益をタイプライターが創造してゐるだけの計画書プランを示し、彼に莊重な約束手形の署名をさせるようになった。もちろんスワンソンは欺だまされてばかり居るのだ。

大蔵大臣をやめて仕舞つてからも、しばしば彼の失策の尻拭いはさせられ続けて来たスコツチの財政家も、とうとう煩に堪え無くなって彼に断り状を送りつけた。それには週末^{ウイーク}休日^{エンド}のゴルフと漁季の鱒釣^{ます}りとは依然親愛の情を持って御交際するが、その他の一切に關しては御交渉を絶ち度いという申出でだ。

もつと既にこの時世界の不況は大英の財界にも押し寄せて来て、彼の顧問会社の脈搏不整はこの偉れた^{すく}財政家に騎士時代の革財布を丹念に繕^{つくろ}うような閑道楽を許さなくなつてもいた。この時スワソン氏の財政状態も即刻スワソン氏の命令を聞く現金はげつそりと減つてしまつていた。ただ、幸といおうか、彼の蘇格蘭の領地と公園小路の古い邸とは彼のものとしてあまりに有名で、非実用的なのが障^{さわ}りで融通に対する利用性を欠いていたため彼が容易に現金に換えようとする重宝には役立たなかつた。そして彼も元來は思慮ある英国紳士である。或る過程までの失敗が却つて彼の打算と反省を明確に呼び起こした。彼は或時期からフランス人のブローカー等を断然しりぞけてしまった。彼は残金と消費額とを嚴重に精算した。そして先ず彼の相続税を予算して彼の死後の処まできめてしまった。これも彼の最後の名望慾が案出したのである。彼が死んだ時、息子が相続税を現金で支払えない代償に領地の半分を県の公園に引取つて貰う相談を彼のいわゆる下品な労働党の政

府に持ち出したり、邸の競売を写真入りの広告でタイムスへ載せたりしたらもうおしまいだ。折角生前あれほど骨折つて欧米に売り込んだ彼の家門の誉れも水の泡だ。

これ程のスワンソン氏の物質的起伏も彼の愛妻である美貌のスワンソン夫人の消費生活にはさしたる波動を及ぼさない。英国紳士たる体面はその愛妻に対してさえ容易に崩壊することを許さない。かくて、スワンソン夫人の生活はいつも平和で甘美で退屈だ。

今、繻子の寝床の介殻から抜けたスワンソン夫人の肉体は軽い空気の中に出てうす白く膨張する。彼女は逃げた肉体の重心を追う格好で部屋の左側に沿い室内靴をじゆうたんにすりつける。

およそ強奪したものはみな美しいとは英国の貴族の祖先が近東を荒し廻った海賊船時代からの経験である。スワンソン夫人のピジャマはオックスフォード街の××高級品店から売出し前に強奪した自然絹だ。その代り××高級品店はスワンソン夫人から定価以上の小切手を強奪した。この二重の強奪が行われているスワンソン夫人のピジャマに二重の魔美が潜んでいるのは合理的だ。ライラック花模様がペルシヤの鷹狩の若衆に絡んで光沢の波に漂っている。

夫人は部屋のカーテンを順々にめくり初めた。第一の窓から見る檜の茂みが過剰な重み

で公園の鉄柵を噛んでいる。第二の窓からやや遠方を見る。其処の屋上起重機はロンドンの今朝の濃霧を重そうに荷っている。第三の窓をめくった時金具の磨きのぴかぴか光る騎馬が一騎高いななき乍ら^{なが}眼近の道芝に蹴込んで来た。彼女は不眠の眸瞼に点染するように逆に第三から第一の窗外風景を今一度のぞき返した。

多少の光線を恵まれたので室内の装飾の線の弧と、面の屈折と、角の直截と、金属性の半螺旋とがおのこの適処適処に光を受留める。霧が追々薄れて窓からはいる光が増して来ると、新進室内装飾家G―氏の特性が追々明らかになって来る。

鼠大理石が銀の肋^{ろつこつ}骨を露出してマホガニーの木理の義足で立っているテーブル。曇^{くもり}硝子^{ガラス}のさかざきが数限りなく重なり合い鋼鉄の尺木の顎^{あご}に花を咲かせている照明燈。金魚がマホメット^{カセドラル}本寺^{ドーム}の円頂塔に立籠^{むか}つて風速に嚮^{むか}っている、それをコルクの砂漠に並んでアネモネの花が礼拝している。これは活花台だ。月光を線に延ばして奇怪な形に編み上げたようなアームチェアや現代機械の臓腑の模型がグロテスクな物体となって睥睨^{へいげい}し嘲笑し、旧様式美に対する新様式の反逆を直截簡明に宣言している一群の進撃隊のようだ。

この芸術的手法に於てスワンソン邸のジョージアン式の骨董的建物の心臓に喰込み、そ

の建物の軀幹を侮辱^{ぶじよく}するような振舞いを新進室内装飾家G―氏に委嘱したスワンソン夫人にそれを後援する明確な現代的新意識があるかというに、それでも無い。夫人はこの部屋が出来上った時G―氏に云った。

「まあ奇抜ね。But……少し品が足り無いようにわたくし思いますわ」

もちろん夫人はジョージアン式の古い邸宅のカビ臭さには尚更幾つものButを続けた結果この新式を招致して見たのだ。それでも矢張りButである。そして彼女は夫スワンソン氏にも劣らず彼女が持ち続けて居る彼女の家系的プライドに対してさえ英国民主主義的批判を時々振りかざして見る。

「――But。貴族なんてまったく前世紀の遺物よ」

ああでも無い。こうでも無い。一たいどうなのであろう。

英国の社会層の中にButクラスという貴婦人達の一層がある。ヴィクトリア朝以前から現代まで持続している豪家の子女達はその豊富な物資に伴う伝統的教習に薰育されて、随分知識も感覚も発達して居る。だが結局その知識や教習がやがてそれ等自身を逆に批判し返す程の発達を遂げた。然^{しか}しもともと受けた薰育の中枢はやはり伝統的教習であるから、いくら時代に刺戟されても断然新らしくなり切れもしない極端に発達した感覚は当惑し彷徨

徨し、疲労する。やがていくらかの麻痺状態にまで達して何を見ても、何に接しても全部感銘し切れない。

「これ、好いわね、But（だけれど……）」

「そう、それも好いわね、But（だけれど……）」つまりButの数限りない連続が彼女等の生活の行進体の大部分なのだ。

Grenadine 《グレナジン》 $\frac{1}{2}$ Drygin 《ドライジン》 $\frac{3}{8}$

玉子の白味一つ。

今、スワンソン夫人に命令された給仕男は鸚鵡返しにその通り復誦する。これは朝飯の「カクテール」と呼ばれているものであつて、美髪師「マダム・H」のサロンから夫人が覚えて来たものである。「美髪師マダム・H」は顧客の引付策としてスワンソン夫人始めロンドンのButクラス婦人達を招いて毎週一回カクテール・パーティーを催す。それにはサヴォイ・ホテルの酒場主任が出張して世界の新流行のカクテールを混合筒から振り出して紹介する。「朝のカクテール」は夫人が其処で今まで覚えたなかで気に入ったものの一種だ。

だが、給仕の男が恭しくグラスを捧げて来た時にはもう夫人の気が変わって居る。

そうだ。カフェ・カクテル。今朝はあれをやって見なくちゃ。

給仕は姿勢を取り直してまた夫人の命令を復誦する。

玉子の黄味一つ。茶匙に砂糖一ぱい、ポートワイン三分の一。ブランデー六分の一。ダッチ・キュウラソオ小グラス一ぱい。

今度給仕が持つて来たものをみると成程カフェ・カクテルとはよく名を付けたものだ。これは熱帯国の木の実が焙じられた時、うめき出す濃情な苦渋の色そっくりだ。酒であつて珈琲コーヒー、珈琲であつて酒なのだ。夫人は霧の朝の蒼暗い光線にグラスを浸してしばらく錯覚を楽しむ。二つの認識に疲れ飽き他の認識を開拓する勇気を欠いて居るBE階級の人々はこの両者が交感する屈折光線の世界にしばらく楽な新味を貪むさぼらうとする。この錯覚の世界もまた当面に直視するとき立派な事実の認識として価値を新に盛つて来るのだが、夫人はそれ程骨を折らない。ただ、イージーゴーイングに感覚がトリックにかかもてあそぶだけだ。夫人の興味は直き次に移つて犬のドクトルが部屋に呼び付けられた。老人の獣医は毎金曜、狎ちんの歯を磨きに午前中だけ通つて来る。今も玄関の側部屋で仕事にかかつて居ただのだ。

老人が狎の健康状態の報告に入ろうとするのを押えて夫人は云つた。

「珈琲を一つ交際つきあつて下さらない？」

老人は夫人に珈琲と云つて与えられた椀の中のをすぐ酒と悟つた。元來酒好きの老人なのでそのまま居坐つていかにも浸み込むように飲む。夫人のトリックにかかつて「酒か珈琲か」と飲み惑つてあわてふためき夫人の笑う材料になつて呉れない。

「驚きましたな。驚きましたな」

と口では云うがそれがただ相槌あいづちのお世辞に過ぎ無い事は夫人にもよく判る。しまった、と夫人は想う。ドクトルはやはり寒い側部屋で酒に餓えさせ乍ら獣の黄色い牙を磨かせて置く方が興味価値があつたのだに。夫人はこれほどまそうに飲む老人の嗜慾セラシイに嫉妬を感じた。

生々しい膝節を出してスカートのような赤縞のケウトを腰につけたスコットランド服の美貌の門番ガードマンが銀盆の上に沢山の「平凡」を運んで来た。

答礼の花束。

レセプションの招待状。

慈善病院の資金窮乏の訴え。

トルコ
土耳其風呂の新築披露。

コナンドイル未亡人からとどいた神秘主義実験報告のパンフレット。

国際聯盟婦人会の幹事改選予選会報。等、ほかにまた一通夫人がしばらく手にとつて眺めて居たものは古着払下げの勧誘広告だ。夫人の感情はこれに少し局部的の衝撃をうけた。

——失礼な——だがためしに売つて見ようか——だが——。

午前十一時半。ふらんす風の正式の「昼の朝飯」前に夫人は居間附応接室で彼女の夫と朝の挨拶を交す。

モーニングの夫は眉を動かして、

「グロリアス結 構な天気じゃないか、奥」

そして彼はあらゆる問題に五分から二十分間位討論する用意は持つて居る。「イギリスがもし注意を欠くなら」という前提で。だが、それから永くなるとぐつと反身そりみになつて、「むろん、わしよりもそちらがこの問題についてはセンシブルな意見を持たるる筈だが」と、微笑にまぎらす。夫人もまた、たった一つの方法で夫の一日の機嫌をよくして置く。それは彼の名声に関して話すことだ。

「××伯爵がたいへんあなたの事をよく云つて居られました」

この一言の注射はスワンソン氏の上機嫌を二十四時間保たしめる。

夫人は後妻だ。彼女が前に経験した初婚の年齢の均衡の取れた夫婦関係では夫が青臭く匂って張合いが持てなかったが、今の「若く美しき後妻」の位置とても彼女を緊張させは仕無い。ただ割合わづらいに煩わづらわされず勝手な懷疑と孤独とを自分に侍はべらせて居られるのを取柄として居る。

彼女はなぜスコッチ服の若い門番に眼をつけ無いか。ふしだらもふしだららしいのはアカデミック小説の履行で何の刺戟も無い。彼女はこの頃貞操という事にエロチシズムを感じて居る。

卓上には昨夜彼女が見なかった夕刊新聞が今日の朝刊と一緒に載っている。それには、アインシュタインを叮嚀ていれいにもてなして居るバアナアド・シヨアの写真が出ている。彼女はここらもち夫の方へ首を差し出しその写真を見せながら不服そうに云った。

「ねえ、あなた。シヨアのおやじは、あの空威張りの傲慢の時の方が似合いますね。アインシュタインがいくら偉大な学者だつて、もともとユダヤ種のドイツ人じゃありませんか……（あとは独言のように）でもシヨアだつて洗つて見ればアイリツシュだから妙に如才じやうさいない処もあるんだわ」

スワンソン氏はタイムスのぼうだい彫大な紙量の上に遠視眼鏡を置き、霧の朝の薄暗い室内を

明るくする為に卓上電燈のスイッチを捻った。夫人が次にめくったD紙の社会面にはこんな記事が簡単に載っていた。

××街の大劇場○○座が今度経営困難に陥り米国の富豪某氏所属のデパートとなった。旧劇場附属の人員は此の際大方採用されて、その新百貨店の使用人となった。なかに旧劇場で案内係をして居た一人の娘の親が英人の娘として米人の使用人になることは英国の不節操であると同時に米国への屈従であると云つて断然許さなかつた。新職業に就いた多くの友人に残された娘は気が違つて自殺した。

夫人は一瞬この記事の小さな娘気を可憐に思った。そして近頃ますますロンドンに侵入する米国物資の跳梁ちやうりやうを憎んだ。が、次の瞬間米国への聯想が夫人の心を広々と明るくしていた。夫人はこの夏の休暇にはサウザンプトン港から新造の米船に乗りニューヨークに上陸してはるばる北アメリカを横断する計画が良人と約束してある。ロンドンよりもずっと清新なニューヨーク街の雑沓や速力の早い汽車の南側から眺める米大陸の深林の緑が夫人の空想のなかに浸み込む。だがそれもやがて夫人の頭の倦怠素ににぶく溶け込んで行つて夫人はかすかな朝の眠気に誘われはじめた。

青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集」ちくま文庫、筑摩書房

1994（平成6）年2月24日第1刷発行

底本の親本：「世界に摘む花」実業之日本社

1936（昭和11）年発行

入力：門田裕志

校正：オサムラヒロ

2008年10月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

バットクラス

岡本かの子

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>